

# ひょうたん島通信

大槌発! 第21回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島ほうらいという小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



## あの忌まわしい震災から3年半

黒沢 正隆

国際沿岸海洋研究センター 特任専門職員

震災の事は皆様の知るところであり、ここでは省略。2011年4月8日に来町した濱田総長の「復興宣言」は、立ち止まるなかれと背中を押してもらったような気がした。国際沿岸海洋研究センターを甦らせることが被災地大槌への応援メッセージであることも知った。早速、当時の生産技術研究所の河谷特任教授の下で、動き出す。軽油の確保、水道・電気技術者の確保に奔走する。土地勘のある私は、避難所を回り業者をさがした。資材も作業員も不足する中、みんな快く引き受けてくれた。頭が下がる。5月には、センターのがれき処理のため、東京より業者の方10名が到着。宿舎まで往復3時間の道のりを通い、たった10日間で作業を終了させた。最後の日、彼らから遠慮がちに「避難所の子どもたちにお菓子をあげたい」との申し出があった。避難所は餅つきイベント中。早速担ぎ出された。ガタイのいいお兄さんたちの笑顔と涙を忘れまい。

目の前の防波堤は崩壊し、部分通電のセンターは、地元職員であるセンターの船舶部が管理する。本当に復旧するのか、センターは甦るのか不安がなかったわけではない。しかし今は心をひとつにして

前に進むしかない。これまで力を貸してくれた人たちを裏切るわけにはいかないのである。さて、観測船の確保に移る。(有)須賀ケミカル産業との交渉の結果、復興第一船として竣工すると約束してくれた。8月竣工。ありがたいことである。月日は流れ、現在、グランメーユも係船場を地元の漁師仲間に譲ってもらい、大槌湾に漂う。これで蓬萊島が元通りだったらなあと思ってしまうが…、過去は振り返らない!

観測業務も多忙を極める中で、後輩には技術指導はさることながら、我々の業務は地元の協力なくしては出来ないということ強く言っている。どんなに復興しようとも便利になろうとも人との関わりをおざなりにしてはならないと言っている。震災で強く学んだことである。

凡人の私には、一つの謎がある。震災前夜、庭に出たら、青い光の帯が目の前を過ぎた。「俺は死ぬのかな?」と呟嗟に思った。

昭和30年代の大槌湾・蓬萊島(ひょうたん島)。桜の咲く頃、一年でいちばん潮が引く時期におこなわれた親子遠足の風景。この蓬萊島の海辺一帯は震災で崩落。



約30年前、父親が死んだときアフリカ沖の洋上でみた光景と同じだった。この謎はなんだろう。年配者は「父さんが守ってくれたんだ」という。地震発生時、すぐさま大槌センター長(当時)と避難誘導。取り越し苦労ではないかと思うほど早くに【全員避難】した。この安堵感には生涯変わるまい。教職員のみなさまに感謝申し上げます。

## ぴーちゃん日記

### 大槌湾から世界の海へ!

「ちょっと魅せます海の最先端研究」と題して、7月30日~8月3日までの5日間、プロジェクトグランメーユと国際沿岸海洋研究センター主催で特別イベントを行いました。

場所は何と!大槌町の誇る「ショッピングセンターマスト」です(第2回ひょうたん島通信コラム欄参照)。大槌町民の憩いの場、交流の場であるマストでのイベントなので、8月2~3日の週末に行われ

た、沿岸センター教員による講演会や煮干し解剖等のイベントには大勢の町民の方々にお越しいただき、盛況のうちに終了することができました。

震災前は、毎年7月の海の日に沿岸センター施設を開放して「海の日一般公開」を行い、1,000人以上の来場者で賑わいを見せていました。しかし、震災後は開催できず、町民の方々と沿岸センターとの交流が薄れていた印象が自分にはあり

ましたが、今回は久々に町民と研究者とのよい交流ができた、よい企画だったのではないかと思います。



「スナツブコケムシ、見つかるかな〜?」

制作: 大気海洋研究所広報室 (内線: 66430)